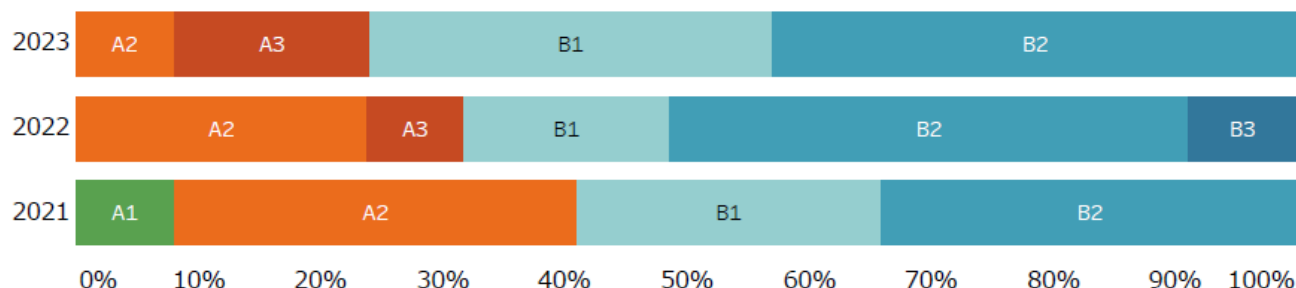


2023年 雙葉 算数

過去3年の思考コード別出題割合は次のようになります。大問5題構成は変わっていませんが、2022年と比べると、取り組みやすい問題が多く、全体的な難度が下がった印象を受けました。例年、計算の手間がかかる問題が出題されるため、計算力の養成は欠かせません。また、式や考え方も問う問題が出題されるため、採点者に読み取ってもらうことを意識して、ていねいに解答する必要があります。



大問1は、例年通り一行題の構成でした。(1)の計算は、「2023（正確には20.23）」が出ていました。手間はかかりますが、ていねいに計算して確実に得点しておきたいです。(2)も、典型的な平均算の問題です。ここも落ち着いて得点します。

学習指導要領の改訂による小・中学校での「プログラミング」、高校での「情報」の必修化によって、ここ数年、データの活用に関する問題が広く見られるようになりました。(3)は、データの大きさを表す「バイト」がテーマとなっていました。今年の桜蔭でも、論理演算で必要となるベン図の理解を問う問題が出題されていたため、データの活用に関する問題の対策は欠かせません。

大問2は、観覧車のゴンドラを素材とした速さの問題でした。計算の数値が複雑ですが、落ち着いて正確な計算処理をします。大問3は、正六角形の辺上を正三角形が回転する問題でした。類題に触れたことのある受験生も多いと思います。ていねいな作図と共に、やはり、正確に計算処理をする力が求められます。大問4は、円柱の水そうに組み合わせた容器に水を入れる問題でした。「容器に水を入れる問題」を苦手とする受験生は多く、ここで差がついたと思います。底面積、高さの比を活用して取り組んでいきます。大問5は、品物の個数が複数の売買算でした。(1)は、 $2156 + 1540 = 3696$ (円)が差となる点に注意します。(2)は、売り上げ「10026円」の末尾「6」に着目します。すると、Bの個数は4個、または9個に絞り込むことができます。それぞれの場合について、つるかめ算を利用してAとCから個数を求めていきます。

例年通り、計算の数値が複雑で手間がかかります。そのため、計算力は欠かせません。また、式や考え方を書いたり、作図をしたりする問題が出題されるため、採点者を意識したていねいな解答を心がける必要があります。あくまでも予想ですが、大問3(2)、大問4(3)、大問5(2)を落としたとしても、およそ7割程度には達することができると考えられます。